

# おもしろ にいがた学

新潟方言・郷土史研究家 大田 朋子

プロフィール

新潟市出身（出生地は柏崎市）  
東京で大学・研究室生活を経てUターン  
雑誌記者、コピーライター、ライター、インタビューの仕事をするうちに、方言や習俗、歴史に魅せられ、研究、普及につとめる  
心理学・新潟学等講師、経営学修士（MBA）  
著書「独断大田流にいがた弁講座」（新潟日報事業社）  
「おもしろ えちご塾」（恒文社）等

## 「ちいちいふうふう きょつろきよろ」

新潟弁に限らず、方言の魅力は、その語感やことばのリズムにあると思います。たとえば、魚の活きの良さを表す富山の方言に「きときと」がありますが、獲れたての魚の目玉や鱗の光具合がまざまざと浮かんでくる、ばーかいい言葉だと思います。

先日の吹雪の日タクシーに乗り込んだら、運転手さんが「いやっや、ちいちいふうふうになってきましたね。今夜冷えてきますね…」とおっしゃいました。私は思わず、この劇画的な言葉、新潟の古い表現の吹雪の様子を表す「ちいちいふうふう」にびっくりして、「運転手さん、ご出身は新潟のどちらですか？」と聞きました。それというのも、話や方言集の中でしかお目にかかれなかった新潟独特の「ちいちいふうふう」をこの耳で初めて聞いたからです。優しそうな初老の運転手さんは、「内野（新潟市西区）です。吹雪いてくるのを表すばーかいい言葉ですがね」と目で笑い、ルームミラー越しに、しばし方言談義となりました。

鉛色の空から、そして地面からも舞い狂うように吹きつける吹雪。強い北風の中で荒れ狂う様子を的確に「ちいちいふうふう」は表現しています。

これ以外にも雪国新潟には、冬の自然現象を表す独特の言葉がみられます。たとえば、ちいちいふうふうが、次第に雪に変わって道が凍る状態を、下越では、「きょつろきよろ」と言います。これは、あたりを見回してきよろきよろする、という意味でも発音でもありません。きょつろの「ろ」にアクセシ

トをおいて発音します。すると、あら不思議（?）、雪が踏み固められて、てかてかつかつるつるに凍った状態、ピカピカ状態で、滑らないように細心の注意をはらって歩かねばならぬ、といった雪国ならではの決意が感じられるではありませんか! 「道が凍ってきょつろきよろだから、転びなさんなや」と使用します。ちなみに、石川県の金沢では、この状態を「きんかんまなま」と言い、こちらも、道がてかてかきんきんに光っているさまをよく表していると思います。

さて、寒い屋外、屋根から下がるは「かねこおり」（金氷）これは、つららのことですが、かちんかちんに凍った状態がまるで金棒のような感じをこれまたうまく表現しています。かねこおりはやがて溶けますが、この溶けた雫が、偶然にも首筋にあたったら、「あきや、はっこい！（ひゃっこい）」（はっこい は主に下越で、ひゃっこい は主に上・中越）と思わず口にします。標準語の「冷たい」よりもさらに、温度の低さと驚きが感じられるというものです。

ここ数年暖冬といわれていましたが、昨年より今年にかけて日本海側はまさに雪国の冬模様。鉛色と白の世界の中、先人たちが生み出してきた語彙の力と表現的確さをあらためて認識しています。とはいえ暦は春近し。皆様、さ～め（寒～め）けど元気で過ごしてください。

